

今年も終わりに近づいた。ふりかえってみると安保問題をはじめ宇宙船の打ち上げなど歴史をゆるがす大きなことがらいくつもあった。身辺の人たちにも生死いくつかの送迎のことがあった。宇宙世紀において、地球の、そして人類の将来がどうなっていくかという大きな次元での問題、巨視的な問題のなかで、身辺の1人の人が死んでゆき、身辺の1人の人に新しい生命が賦与されてゆくといったような微視的なことがらは、一体どうつながるのであろうか。生まれたり、死んだりしてゆく、その主体にとっては、それはかけがえのない絶対のことであるのだが、悠久の宇宙の生命のなかでは、1人の人間の生死の問題は、大海の中の流砂の1つぶみたいたいものである。

ある意味では、その大海の流砂の1つぶに、今年は私にとっては忘れられない友人原田義人の死があった。新聞に出たから知る人は知ったであろう。原田は一高時代から周囲に敵を作らない、きわめて奉仕的精神に富んだ男であった。彼の一見ひよわそうな、きゃしゃな、そして実

は芯の強い身体を支えた生命は燃焼し尽きてしまったが、彼の常に微笑をたたえた叡智のまなざしと誰にも愛される風貌姿勢は、永久に消えないおもかげを残している。東大教養学部助教授の原田義人は死んだが、私たちの友人原田義人は、やはり永遠に生きている。今でも「ヤア」と手をあげて「人なつこい微笑が呼

編集デスク

2

原田義人の死

長谷川 泉

びかけてくるようである。

彼は一高時代は文芸部に関係しなかったが、東大へ入ってからは広い積極的な文学活動を開始した。加藤周一や中村真一郎や福永武彦や白井健三郎などの文学グループに結びついた活動や、演劇関係の仕事がそれであった。頼まれればいやとは言わないで、いろいろな仕事をした。実力があり、かつ人格もよく、そして奉仕精神に富んでいるから、必要以

上にジャーナリズムに動かされ過ぎたところもあったようだ。そのことには、彼が本当にやりたい仕事との結びつきもあったであろう。

私がドイツを訪れベルリンまで行ったとき、彼はハンブルグに留学中であつた。無理をして会おうと思えば方法はあったと思うがそれは果たさなかった。ドイツから帰った彼の仕事は精力的であつた。そして有能な若い魂は困憊して死んだ。

だが原田義人は、私たちには生きている。生死とは何であるか。70まで生きることが一体どういう意味があるのか。やりたい意義のあることがやれたら、そのことをもって、その生の終わりがあって一向さしつかえないのではないか。と言つて、原田が、やりたい仕事をして死んだというのではない。たくさんやり残しの仕事を残して死んだのではあるが。それにしても一高時代からの、すぐれたるえらばれた仲間たちが若くして逝くのは、惜別にたえない。東大の古谷教授、東北大の松本教授など。そして、今年は原田義人の死である。巨視的に、流砂の1つぶとすませない気持である。

(医学書院編集部長)

と患者の関係にはね返ってくるのである。ビュロークラティックな巨大な人間組織(病院や官庁)の中で、身分的秩序と上下的な規則にしばられた人間歯車が人間性を喪失しがちなことは、戦前のわが国の軍隊がよく示してくれたものであつた。しかもかかるピラミッド型の閉鎖社会にこそ、日本社会の病理がもっとも典型的にあらわれてくるのである。生きた「人間」を扱うひとびとが、逆に人間を喪失しようとしている悲劇を、よく見つめなければならない(註3)。

(註3) T. Parsons, Structure and Process in Modern Societies, 1960, 参照。

しかし、この問題はあながち一つの病院や医療機関の内部だけの問題ではなさそうである。資本主義の世の中では、あらゆる官庁も企業体も資本の論理にしたがわなければならない。輸入原価70

円のものが患者には1,000円以上で渡っているという。最近のソーク・ワクチンの値段の問題にもこの点がよくあらわれている。経営者は経営者で資本の論理と患者や職員の要求との板ばさみになっているのである。資本の論理→経営者の論理→医者論理→看護婦の論理→患者の論理という上からの系列と、生活の要求→患者の要求→看護婦の要求→医者の要求→経営者の要求→資本の要求という下からの系列とが、互いにぶつかり合うところ、これが医療的人間関係の論理と心理をくまどる粹組を形成するといえよう。どうやら、教育者が教育され、治療者が治療されなければならない時代が、しだいに近づいているように思われる。

(本稿は本夏開催された看護管理者講習会での話に少し手を加えたものです。)

(筆者・東京学芸大学教授)